

知識と方法：アリストテレス『分析論後書』における 論証と探求の観点から

酒井，健太郎

<https://hdl.handle.net/2324/1931668>

出版情報：九州大学，2017，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	酒井 健太郎			
論 文 名	知識と方法——アリストテレス『分析論後書』における論証と探求の観点から			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	倉田 剛
	副 査	九州大学	教授	円谷 裕二
	副 査	九州大学	教授	菊地 惠善
	副 査	東京大学	教授	納富 信留

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、アリストテレスの『分析論後書』（以下『後書』）——『カテゴリー論』、『命題論』、『分析論前書』等と共に「オルガノン」（学問の道具）と呼ばれてきた——を、論証と探求という二つの観点から統一的に読み解こうとする試みである。伝統的な解釈は、長きにわたり、『後書』に、「学問の方法論」という位置づけを与えてきたが、二十世紀後半に入り、こうしたオーソドックスな解釈に対する異議が唱えられるようになった。Barnes は、『後書』の主要な目的が、方法論にではなく、完成した学問の構造を提示することにあったと主張し、Bronstein は、その目的が「学び」の観点から知識論を示すことにあったと主張した。酒井は、これらの異なる解釈が相互に排他的なものではなく、アリストテレスの知識概念を明らかにするために不可欠であることを強調し、『後書』の統合的な解釈が可能であることを主張した。しばしば第 1 巻の数学的事例を典型とした論証理論と第 2 巻の自然科学的事例を典型とした探求が対比されるが、本論文は、論証と探求との関係を丹念に考察することで、ときに「パッチワーク」と揶揄される『後書』の全体としての目的と意義を明らかにすることに成功した。

第 1 章では、『分析論』における「分析」の意味が考察され、アリストテレスが数学における分析と総合を探求と論証に置き換えることで、より広範に適用可能な方法論を模索したことが明らかにされる。第 2 章では、必然的知識の条件としての「自体性」と論証との関係が、「緩やかな自体性」という独自の概念を用いて明確化した。第 3 章では、論証理論が自体的命題以前の原理として、「基礎に置かれる類」の基礎措定と定義の相補的關係を用いることによって成立することを、テキストに基づいて示した。第 4 章においては、論証によって明らかにされる自体的属性が、諸学の独立性を基盤とした概念であることも明らかにされた。第 5 章は、「名目的定義」と「部分的定義」というキーワードのもと、論証理論の枠組みで探求論が規定されること、また定義の探求が論証に依存することを示した。第 6 章において、論証とは先立つ X の意味内容の把握から、その意味内容が真であることの証示することであるが、それを行うためにはその根拠の探求が不可欠であることが論じられた。第 7 章では、存在の探求と「何であるか」の探求が論証理論の中に分節化して含まれることを指摘することにより、論証が探求をその構成要素として含むことが示された。第 8 章では、『命題論』の意味論から、X の部分的定義の重要性が強調され、さらにその意味論が「虚構的対象」にいかにして適用されるかが検討された後、虚構的対象についての思考内容の客観性がエンドクサ（通念）によって担保されることが明らかにされた。第 9 章では、「第一原理」の問題に取り組み、とくに専門家／素人という区別を用いて、基礎に置かれる類の定義に関する問題を解決した。

最後の第 10 章では、「講義録」としての『後書』の聴講者に関する考察を行い、『後書』の教育的な意義を明らかにした。

以上のように、本論文は、解釈史の中でコンセンサスがあるとは言い難い『後書』の目的とその全体としての意義を統一的に提示することに成功しており、この分野の研究に一定の貢献をなしたと云うる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。